

高齢者施設、コロナとの闘い続く 重症化リスクで今も対策 関心薄れ「取り残されている」青森県内

2/3(月) 東奥日報



八戸市の特養ホーム「瑞光園」の職員は、感染防止に気を使いながら介護業務を行っている＝1月31日（同ホーム提供）（東奥日報社）

青森県内の複数の高齢者施設で今冬、新型コロナウイルスのクラスター（感染者集団）が発生している。各施設は感染拡大抑止に神経を使い、利用者の面会や入浴の制限などの対応を取る。福祉関係者は「高齢者は重症化リスクがあるので、緊張感を持って業務に当たっている。感染対策は続いている」と話す。

弘前市のある特別養護老人ホームでは1月中旬から下旬にかけ、利用者約30人が新型コロナウイルスに感染した。

感染者に対し、それぞれの居室で食事を取ってもらったり、入浴を休止して職員が体を拭いたりした。行動が制限されたことにより不安を訴えたり、認知症を発症したケースがあった。

一部の利用者は十分な食事や水を取れずに体力が著しく低下した。弘前圏域の医療機関の病床に余裕がなく、入院を受け入れてもらえなかったこともあった。

職員は防護服を着るなどして感染者の介護に当たっており、担当者は「感染対策をいつまで行わなければならないのかという不安がある」と語る。「新型コロナが5類になり、世間のコロナに対する関心が薄れている中、われわれだけが社会に取り残されている気がする」とも述べた。

同市の別の特養ホームでは1月下旬、15人の利用者が感染。事務局長は「高齢者は体力

がないので、コロナが治った後でも衰弱している」と不安を語った。

新型コロナは2023年5月の5類移行後、毎日の全数把握から、指定医療機関の報告に基づく週1回の定点把握になった。クラスターは集計されていない。

弘前市の健生病院では今冬、高齢者施設から新型コロナの感染者が救急搬送されてくる事例が目立った。救急集中治療部の太田正文科長は「なかなか状態が良くならず受診する人や、肺炎で搬送されてくる人が多い」と話した。

八戸市の特養ホーム「瑞光園」の澤田章施設長は「医療・福祉施設では今も感染防止に多くのエネルギーを使っている」と語る。同ホームでは昨年12月、職員約20人と利用者約50人の計70人が感染。4人が重症化した。澤田施設長は、感染拡大が、体力のない高齢者の生活に大きな影響を及ぼすことを説明した上で「国全体で感染防止対策をもっと徹底していく必要があるのではないか」と話した。